

旧木村倉庫

木村家は小樽沖で獲れたニシンから作られた肥料を保管するため 1894 年に倉庫を建てました。この肥料は本州南西部の藍畑や綿畑に出荷されました。この倉庫は木村家が所有していた 9 つの倉庫のうち唯一残っているもので、20 世紀半ばまで市の貿易と小売の中心地だった堺町通りにある最大の倉庫の 1 つです。この建物は 1983 年に北一硝子が物販・飲食店として改装しました。歴史ある建物の改修と再利用が成功したのをきっかけに他の経営者が堺町通り沿いや運河周辺の旧倉庫をオープンさせ、魅力的な商店街を生み出しました。

継続のための建造

堺町通りは埋め立て地に作られており、通りの港側の倉庫は水際にありました。肥料は木村倉庫前で漁船から降ろされレールに沿って車輪付き手押し車で運ばれました。このレールのある石造りの廊下が倉庫の建物を 2 つに分けています。20 世紀半ばに乱獲のためニシン産業が崩壊した後、この倉庫は乾物を保管するために使用されていました。1960 年代に小樽の主要な港としての地位が低下すると、通りにある多くの倉庫と同様に空き家となりました。トドマツとエゾマツの骨組みに小樽軟石で建てられたヒノキ床の倉庫です。1 世紀以上経っても良好な状態を保っています。

小樽のガラス遺産

1901 年に浅原硝子として創業した北一硝子は小樽に深く根付いています。電気がまだ普及しておらずオイルランプが生活必需品であった時代に手吹きガラスのオイルランプを製造しました。その後、浅原硝子はニシン漁網用のガラス浮きを製造しました。1920 年代までに従業員数約 400 人に達し北海道最大規模のガラスメーカーの一つとなりました。電気とプラスチックの普及とともにガラス製のランプや浮きの需要は減少し、1960 年には小樽に残る唯一のガラスメーカーになりました。

1971 年に販売部門の名称を北一硝子に変更して、その他のガラス製品とともに懐かしい思い出の品としてランプを製造・販売することにしました。ランプは小樽のお土産として今でも人気があります。小樽駅エントランスホールは油の代わりに電球を使った北一硝子のガラスランプで照らされています。旧倉庫の半分を占めるレストラン「北一ホール」には、毎朝 167 個のガラスオイルランプが手作業で灯されます。